

ちようこう 長光寺のチョンピロリン



今泉村に長光寺というお寺がありました。今日は薬師堂でのおこもりも終り、寺の中にはおしょう様一人だけとなりました。

「どれ夜のおつとめでもしょうかのう。」本堂へと向ったおしょう様の姿を、お月様が美しくうつし出していました。お燈明とんめいをあげ一生懸命お経を唱え、木魚ぼぎうをたたき、かねを「チーン」「おや」「一寸首をかしげたおしょう様、お

経をあげる声を低くしてみました。

「長光寺のチョンピロリン」「長光寺のチョンピロリン」たしかに聞えて来ます。

「誰じゃな、今頃。」

返事がありません、そのかわり又、

「長光寺のチョンピロリン」

「長光寺のチョンピロリン」

という声がかきこえてきました。うなずいた、おしょう様は前にもまして大きな声でお経をあげはじめました。お月様は木魚をたたき、おしょう様の手もとを明るく照らしていました。

「長光寺のチョンピロリン」

「長光寺のチョンピロリン」

おしょう様、ちょっとおどけて

「長光寺のチョンピロリン」

障子の外から

「長光寺のチョンピロリン」

「長光寺のチョンピロリン」

おしょう様、声をはり上げ

「長光寺のチョンピロリン」

障子の外から

「長光寺のチャンピロリン」

「長光寺のチャンピロリン」

こんなやりとりがいつ迄も続きました。

いつ迄って？お月様が光りをなくし——お日様が光の手をのぼしはじめる頃まで……。

おしょう様、くたびれたかすれ声で

「長光寺のチャンピロリン」

障子の外から

「……………」

「……………」

おしょう様、

「さてはもう爛りおったか。」

とつぶやきながら立ち上がり本堂の障子をあげました。さつと朝日がさしこみ、さわやかな空気が本堂へ流れこみました。庭先きに目をやると、大きな古ダヌキが一匹、口から血を出して死んでいました。

「かわいそうに、舌をかみきりおったな。」

今回はわしの勝ちじゃ。」

おしょう様はねむい目をこすりながら、大きな古ダヌキの死体にむかって手をあわせ、真面目な顔でお経をあげましたとき。